春秋

きょうは「防災の日」。周知のとおり1923年に関東大震災が発生した日付である。もっとも創設された直接のきっかけは59年9月26日に上陸、5千人を超える死者・行方不明者を出した伊勢湾台風だという。災害への心構えを準備する狙いで翌年、政府が制定した。

▼「〈災後〉の記憶史」（水出幸輝著）によれば、1日に決まった理由ははっきりしないものの、関東大震災に加え、台風の厄日とされる二百十日も理由のひとつだったらしい。現在この日行われる訓練は巨大地震を想定した内容が主流となっている。本来はしかし、様々な自然災害のリスクを再確認する記念日なのである。

▼熊本地震に続き、千葉県と北陸が相次いで豪雨被害に見舞われた。8月の1カ月間に発生した台風は計10個。60年ぶりの多さだという。大量の雨や大地の鳴動だけでなく、酷暑も災害級といえるかもしれない。海の向こうでは大洪水で多くの人が亡くなった。私たちを取り巻く環境のもろさ、不安定さにおののくばかりだ。

▼防災週間がスタートした30日、東京都墨田区の本所防災館を訪れた。都市型水害を疑似体験するコーナーで、子どもが水圧で開かなくなったドアと格闘していた。こうした経験を積み重ね、想像力を働かせることが将来の犠牲を減らす礎となるのだろう。大人もしかり。いよいよ気を引き締めねばならない9月1日である。

掲載日 2026年09月01日 日本経済新聞　朝刊 001ページ © 日本経済新聞社 無断複製転載を禁止します。